句草の実

二十七

詞を名ニ付ル

[V. 42]

PL788
.4
.G4
1654
vol. 42
copy 1
Asian
Japan
Case

200455302

なんうらへハうよなういつくしかりけり。紫のうへの
れ心よをことよ。もぐ〳〵こゝろて給しゆへ。三宮ハ
二条院におはします。基家をぞさうやんごとなき
ものにをきなりなて。こうど（今上）ゑうぞ（略中文）ゑうぞ紀いうじくうな
しうしなりうしづき罪をさせ給なれば。内ずとも紙
をさせなりなへど。なる紙心やすき（二条院）惣こうすこうく
しる給なりけり。れ（白ノ）元服しなてハ。共ゆ（白）宮とさしも。
女（略中文ノ服）一宮。六条院のこれ（紫ノ母ひし對之）これまちの東の基（ひがし）をもよれ
しつしひをおしくなずおはしましておさ夕に忘
まひ罪を給。二宮（白ノ兄之後或ハ二宮）もおなじおとゞのしん愛を。時ぐの
れやすこどしたよしなて。極つぶをれどうしく

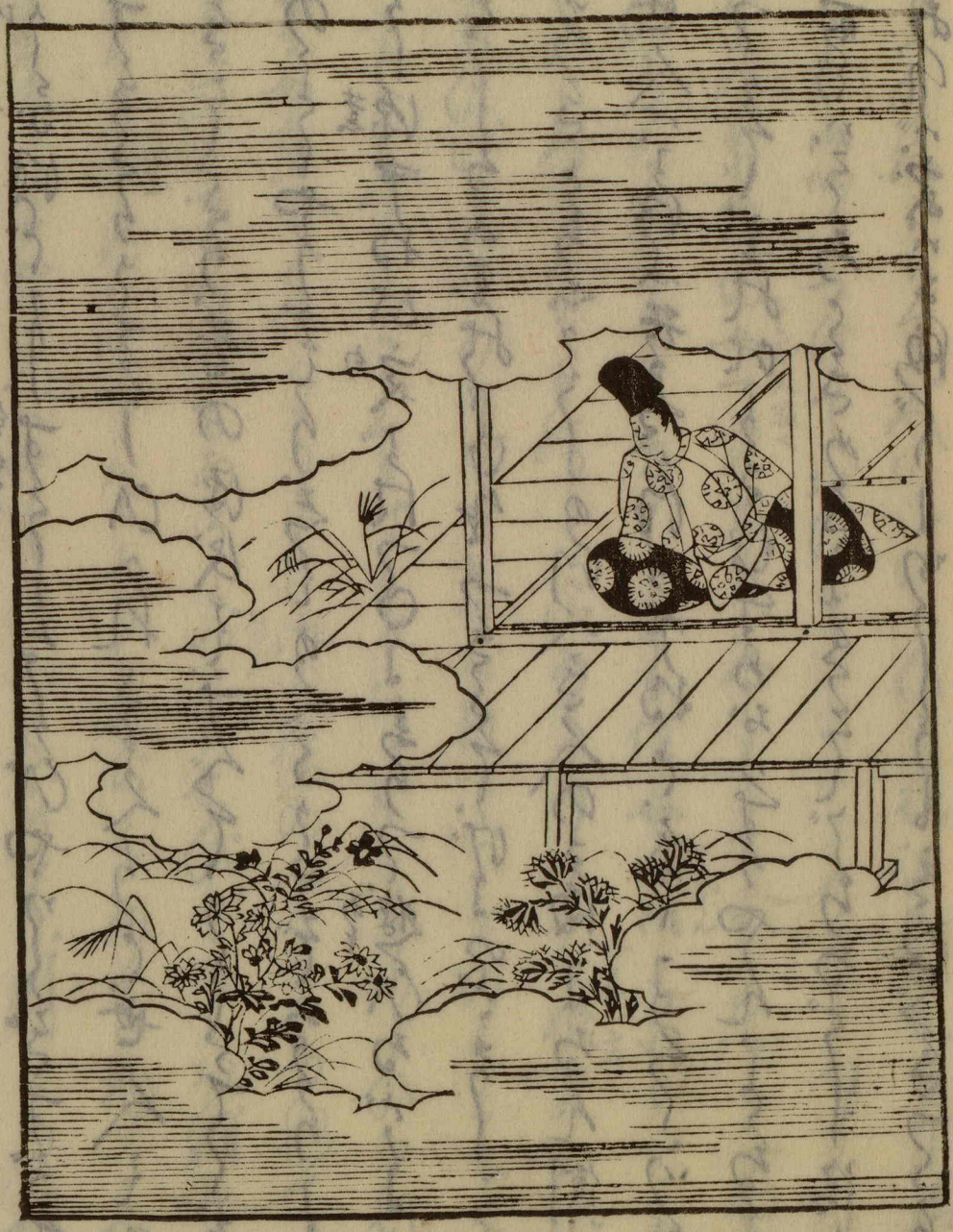
志なて。右のおほいとの中姫君とえなりぬへり。
つぎれ場がねなて。いとおぼしことなおもくしたり。
ひとぐらもすくよりなんもれし給ひ。おほいとの
れむすめは。いとあまたもれし給。大姫君は其家は
まいりなて。またさしろふへなきさ夜にてさふらひ
給。それつぎくこれつねでのまくにこそこと。世
人もさひ事。きさいの家もの給ひすれど。此兵ゆ
家はさしもおぼしたらず。ぷがれこころよりをとし
ざんことなどは。すき夜ぞくも言ぬべきれ気を
なり。おとぐもなりはやうのもれと。されこうな
りういとしげめなへど。またさうれかしきあらん

とばまてきゝれてもおうましうともむけて、いと
いつくしづき聞え給、六の君なんぞのきこえすぐし
られたまふを、世のおぼえかへるみこ達遊アの御心つくしを
うきたひこまもりし給ひける、院かくれ給て後、世の
ご陵りひかひはへらしれうくしたまくしておう
おりすべきすゝうどもまぜのくうりろひあひし
ま、若ち里とまし、二条の院をぞれそうがの御
まそりありまけり、へ右の女いこ条のうやう
おりしまず、いまだきされもしうちまのこゝろつくし給
へじし、院のうちさびもくへずちまちりまけりと、
右のおとゞひとえりへそいろへのこめしとこ

さくまもいける限の世は心をとゞめて川くりしめ
たる人の家ゐの名(みごり)あるく打捨(すて)られて世れなるひ
もつひなくしゆるいひと衰まさられさしらるくを
我よるあしんうぎりぐるこの僧(六条)あらさず。ほとりの
おほちなどひとうげかれもつまじうと思しの給
しきて。うし(地)とし(死ちるゝ給し也)のまちまかれ一条の家(藤家)をひらし
なしせぬてなん。三条(家ゐ)どれと。夜ごとに十文日げく。
うりしうりよひすゝ給ける。二条僧とて川くり
しげき。六条僧の妻のおとゞとて。世にのゝしりし
玉の墓も。ひとりの(的れぐらゝ人とえ)のれすゑのゝあなりかりと
ましてあしのれりくいおまるのゝやうち出れ

うちの人ぐれぐ〳〵しやうちなどはさしうるを
きこしず。限なき事しどがきうきれまで。まうされ
むしき紀の上のれ香精を心にさめくて。第のこゝろ
つけて。世の中の心結をぬ時代ありし。茶の茶の盛を。
げまるずらぬるしも。覚しまさる物になん。二杯表
ミやの茶表は。院の交をしつけのへりしまりに
冷泉院のミうじ。ぞりゝあてかぼしづき。きこさい
の文もみこちちがなりもず。心ばそうかばきうなる。
うれしきされうきろこにまめやうになれことて
のへり。れ元服などもの院まできこせ給。十四まで
二月まで給はるよあり給。朝餉をやかねはぬてれいう

ことに一家かりしけうをなん。かぎりなくうしづき給
れありき後にをとらず。きさいの家のれおぼしの。年
月にまさり給けるひにこそ。などうさしも
とうまでなん。毋こやは今はこれをこなひを
しづうしまて。月ごとにれ会仏。としりふる
こびのれ八講。おりくのこうときれいとなこ計
せしまて。つれぐにおもしませば。此恵の出入給紙。
くりてはおやのやうにこれもしきりにおぼし
これがいと哀にて。院にもうちにもめしまつれし。
其家もつぎくのこやこちもなつしきれ遊び
がこきにてどもなひまへがいとまなくくるしうて。



をばの給ふりて、人のれけまひ五種をも鶴色とり給。
ひざとれ心につけて、おぼせかたへとりあつり
そり。次泉院の女一宮（うきぶん脇に）をぞ、さやうにてもこまらばや。
ひきあらしと思しこうは、母女（うきぶん）れもいとをも
くこころにくもれし給あたりにて、姫宮（次ノ女一宮）のれ
けまひげにとありがたくすぐれて、よそのきても
おいしまする。ましてすこしちくもさふらひあれ
こう女房などのくちしきれ五種のことにふれて
四ちつこふうあどもあるに、いとど（匂ノ）思ひがたくおぼせ
べかめり。中（芸）ねは世中をあくあぢさあるを掲るに
すましこう心あれば、中にこころとゝめて、引きあれ

がてきたや御しんなどたゆまず。ひづらりしきた
あしんあたりまうくづらもんは。けくましくなどた
すて給さしあたりて心にしむべきことのなきほど。
さしぐつにやありけん。人のゆるしなりしんこと
などはましてたよりべくもあらず。十九(芸ノ)に如給とし。
三位の宰相(芸ノ宰相と云こ)にて。私中将もしなれ給ひず。(冷)こうど(秋好)の
内もてなしにこそ人にてはもぐりなきめでたき
人のおぼしにてもしたまへど心のうちには力を
たしかなるにて抽衣りなどもありかれど心に
おもてもやはなりすきごとおきくこのまず。
よろづのことにてしづめて。とれづらしおよすけ

たうころざ海を人まもしられぬへり。三宮（白）そしは
そへて心をくだき給めり。院（冷）の姫宮（女一宮）のれあるをを
うるはもひとつ院（冷ノ）のうちにおけられ立なれぬへば。
ことにふれてし人のありさ海を望まなりに。げに
いとなべてならず心にくゆくしきれもて
なし限なき代（慧心）おなじくはげにうやうなん人を
えんにこそいける限の心ゆくべきけまなれども
なぐらしたるこそへだつ事ことなく覚しれひめ（女一宮）
こやのれうるざ海のへだてはこまなくけどをく
なしはさせ給もこともりてりつづしもしかれば。
おなぐちにもまじらひならず。ましこうよりかの

内侍(注之後)のすけどしの六の君とかいとすぐれておしー
げに心ばへなどもさしひておひ出給せ。よれ見しの
おとしめざ雨なるべきしもかくあたしこさ成心(タツ)
ぐるしう見して。一条(藤之条)家のさるあつかひぐさもなん
られで。さうぐしきにむかへさりてなりたまへ里。
ワざと(タム)はなくて。此人(蓋白)ごにこせ(六宛せ)そめてはかなしず心
とどめ給てん。人のありさ雨せも。こしろ人はことに
こそあるべかれなどし見して。いといけうしうえ
もてなし給はず。いまめしくおかしきやうに。もれ
このこをさせて。人の心けけんとりおほくけうり
なし給。のりゆえれ。へりあるじのまうけ。六条院

達おりしまはれとくりは来り給ましやとぞしとある
さ候て世子の御息中納言右大弁なとさしぬ（三人左ノ子達之）
と遊びあまたゝ御虎はのりまゐりいざちるひそて
六条院へおはすおのや様なるは書のうしろちりて
えんちゝらそうればやもみじ青柳しこさら様はふさ
ふそおもひていり給をげはこうしそ左ていらおらん
仏のれ出まうけはやうのおりかしの心やらしおは
ましめんとえこうちん殿の南のひさしはつるの
ごとく南むきは中かねつさくりかむきさはむかへて
えんがみえてちらと遊びの流れ座ありれらうしけ
ひびきうしまちてみれ面白くちるりはめく舞

三十四紙

て、かゝれる袖だのうち人すゝ風に此前ちらさ梅共
いとゝいたくほころびこぼれたる匂ひのぞと打ちり
けたれるに、例の中(芸)ねの此かほりの、いとゞしくもて
まやされて、いひしらずな面めしらつくのぞく
女房などもやうはあやなく心(もと)深なさ程なれど、かゝ
こそげに此たるもれなりかれとめであへり、おとゞ(タ)
もめでたしとこゝ給、かたちよういもつねよりまさり
て、こゝぞれぬさ面におさめたるとして、右(行)のすけ(芸)も声
なるへ女へや、いたうまらうとぞしやとの給
へば、(芸)すくなるほどに秋のますなど

69038
6 AP78